

大阪大谷大学

平成二十九年 度 入学試験問題（公募制推薦 前期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は全部で十五ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章は、重松清の『ポニーテール』の一節である。小学四年生のフミと小学六年生のマキは、互いの父と母の再婚で姉妹になったばかりで、いまだに家族としての距離がつかめていない。おねえちゃんと仲良くなりたいフミだったが、無愛想なマキの心がわからずに泣いてしまうこともあり、また、マキはマキで、新しくできた妹に戸惑い、感情を素直に出せないでいた。以下の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合上、原文を一部改変している。なお、設問に字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む。)

マキは空き地の前の通りで、おぼさん三人に取り囲まれていた。三人は空き地の両隣とお向かいに住むひとたちだった。

空き地で野良猫のねこに向かって石を何度も投げていたんだ、とおぼさんの一人が言った。出て行け、出て行け、と猫をいじめていたんだ、と別のおぼさんが言った。これって動物虐待ぎゃくたいでしょ、と三人目のおぼさんが言って、最初のおぼさんがまくしたてるように話をシaめくくった。

「猫ちゃんが捨てられてて、かわいそうだから、ごはんあげようと思って外に出たら、石を投げてる子がいるじゃない。もう、びっくりしちやつて、注意したら……」

逆にマキは「野良猫にごはんやるのって、やめてください」と言い返した。それだけでもおぼさんはアタマに来ていたのに、知らん顔をしてマキが投げた石が、手元がくるっとおぼさんの家に飛び込んで、ガラスを割ってしまったのだ。

おぼさんはカンカンに怒って、ご近所まで巻き込んだ大騒ぎになった。

お母さんはひたすら謝った。とにかくガラスを割ったことはこっちが悪い。

でも、「警察に電話してもよかつたんですけどね」と恩着せがましく言う三人は、ガラスのことより猫を虐待していたのがゆるせないんだ、と何度もしつこくムbし返した。ふてくされたままのマキの態度がよほど腹にへ A かねていたのだろう。

でも、石を茂みに投げたのは虐待ではない。フミにはもうわかっていた。ゴエモン二世のために、マキはわざと、本気でぶつ

けず石を投げていた。絶対に。信じる。

それがお婆さんたちには通じない。かわいい猫に石を投げるなんて信じられない、親のしつけが悪いんだ、心を病んでいるんじゃないか、とまで言つて、へ B 罵りつづける。マキもちゃんと言い返せばいいのに、黙つてそっぽを向いたまま、まるで説明しないのがルールなんだと決めているかのよう、口をきゅつと結んでいる。

それが悔しくて、悲しくて、フミは泣きだしてしまった。お母さんがびっくりするのを見ると涙がどんどんあふれ、マキがあいかわらず知らん顔をしているのを見ると、大きな泣き声まであげてしまった。

今日はほんとうに泣きどおしの一日になった。でも、いままでは自分が悲しかったから流す涙だった。マキのために流す涙は初めてだった。

お婆さんたちは、あんたが泣いても関係ないわよ、という顔をしていたが、お母さんはフミの顔をおなかに抱き寄せて、初めて、自分からお婆さんたちに訊いた。

「ほんとうに、石を投げながら、『出て行け』って言っていましたか？」

「……言つてたわよ、そんなふう。ちゃんと聞いたんだから」

「『出て行つて』じゃありませんでした？ 猫にお願いしながら、石を投げてませんでしたか？」

フミはお母さんのおなかから顔を離して、見上げた。口調は質問でも、お母さんの表情には、絶対にそうだ、という確信が宿っていた。お婆さんたちもその確信に気おされたように、急に口ごもってしまった。

お母さんはマキに目をやった。

「この子、猫が大好きなんです」

静かに言つて、「大好きな猫と、この夏にお別れたばかりなんです」とつづけた。

いつもごはんをあげていた近所の野良猫がいた。家の中に入ってくるぐらい、猫のほうもなついていた。でも、夏に引越し

をして——フミやフミのお父さんと一緒に暮らすようになったから、お別れしなければいけないなくなった。

「ウチの庭に来てても、もうごはんはないよ、今度からは自分で探さなきゃいけないんだよ、って……引越しの少し前から、わざと、もうウチに来ないように、猫に水鉄砲の水をかけたり、猫のイヤがるにおいのスプレーをしたりして……」

フミは涙で濡れた目でマキを見た。でも、マキはそっぽを向いたまま、どんなにしても目を合わせてくれない。代わりに、ランドセルの星のシールが、夕陽を浴びて光っていた。

「だからって、石を投げることはないでしょ」

ガラスを割られたおぼさんは、へCへながらも言い返した。「だいいちねえ、注意されて言い返すなんて、なに？ほんと、かわいげがないっていうか」——ねえ、と三人でうなずき合ったところに、お母さんの声がびしやりと響いた。

「マキはいい子です！」

迷いもためらいもなく、言い切った。

あまりの勢いに一瞬ぼかんとして黙り込んだおぼさん三人は、すぐにへXへに返ると文句を言い返そうとした。

でも、その前に、空き地の茂みを見ていたフミが、つぶやくように言った。

「あ……出てきた」

指差した先に、ゴエモン二世がいた。茂みから、とことこと姿をあらわした。いったん立ち止まり、きよとんとしたへDへ顔でみんなを見て、みやあ、と小さく鳴いて、また歩きだして——マキの足元に近づいて、しっぽをすりつけた。

マキはお母さんにへYへでうながされ、おずおずとかがんで、でもフミに負けないぐらい慣れた手つきで、ゴエモン二世を抱き上げた。

II 「おねえちゃんと一緒に帰ってたんだよ！だから、この子、空き地から出て行かなかったんだよ！」
フミは胸を張って、おぼさんたちに言った。「おねえちゃん」のベスト記録が大幅にコウシン^dされた。

おばさんたちがひきあげたあとも、フミたちは空き地の前に残っていた。

お母さんはフミと目が合うと照れくさそうに笑って、「またはねてるね」と癖っ毛のところを指差した。

フミも照れ笑いを浮かべて癖っ毛をつまみ、「かわいい毛」と小声で応えたが、お母さんは自分で言った冗談をもう忘れてしまったのか、「うん？」とヨウリヨウを得ない顔でへＺ＼をゆるめただけだった。

マキはまだゴエモン二世を抱っこしている。背中を向けているので表情はわからない。ただ、赤ちゃんをあやすように体を軽く揺すっているのだろう、ランドセルの星のマークが、ときどき夕陽を浴びてまばゆく光る。

「帰ろうか」

お母さんはマキに声をかけて、ゴエモン二世が入っていた段ボール箱を拾い上げ、小脇こわきに抱えた。

「連れて帰るの？」

フミが訊くと、「言ったでしょ、お母さんもおねえちゃんも、犬より猫なんだから」と含み笑いの顔になって、「お母さんにも抱っこさせてよ」とマキに言った。

「あとで」

マキは背中を向けたままそっけなく応え、ゴエモン二世をさらに強く、深く、ぎゅつと抱っこして、体を左右によじった。

ランドセルの星がキラキラ光る。ポニーテールが揺れる。

おねえちゃんのかわいい毛は、あのポニーテールの中に隠れているのかもしれない。フミはふと思ひ、^{III} わかりづらいよお、と笑った。

(注) ゴエモン二世：空き地に捨てられていた子猫。父親の再婚の前にフミが飼っていた猫のゴエモンは死んでおり、フミは

この子猫に出会った時に、死んだゴエモンの生まれ変わりのように感じ、この子猫を飼うならゴエモン二世と名付けたいと思っていた。

冗談

…お母さんがフミの癖っ毛について言った、次の言葉。「こんなふうにはねちやつてるんだけど、見ただけで気分が良くなって楽しくなってくる髪の毛のことを、『かわいげ』っていうの。それで、そういう『かわいげ』の生えている子が、かわいげがあるってわけ」

問一 二重傍線部 a く e の片仮名を漢字に直せ。

問二 空欄へ A へに入る最も適当な語を、次のアくエの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 堪^たえ イ 置^おき ウ 据^すえ エ 立^たて

問三 傍線部 I 「ゴエモン二世のために、マキはわざと、本気でぶつけずに石を投げていた」とあるが、マキは猫（ゴエモン二世）に対して何を伝えたかったのか。本文の会話文の言葉を用いて、四十字以内で答えよ。

問四 波線部 i ~ iii の「の」と文法的に同じ役割のものを、次のア ~ エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア いつのことだろうか。
- イ 彼はどこにいったの。
- ウ かの有名な校長先生。
- エ だますのはよくない。

問五 空欄へ B ~ D に入る最も適当な語を、次のア ~ エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | | |
|-----|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|
| へ B | ア | とうとう | イ | さんざん | ウ | とたんに | エ | にわか |
| へ C | ア | ひるみ | イ | ゆるみ | ウ | さぐり | エ | たぐり |
| へ D | ア | なさない | イ | なにげない | ウ | あどけない | エ | さりげない |

問六 空欄へ X ~ Z に入る最も適当な漢字一字をそれぞれ答えよ。

問七 傍線部Ⅱ「フミは胸を張って」とあるが、この時のフミの気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 猫がマキになつていることから、マキが本当は「いい子」であることが確認できて嬉しい気持ち
- イ マキが猫をいじめていたのではないことを知って、おばさんに言い返すことができ嬉しい気持ち
- ウ 猫がマキになつていることから、マキが「いい子」であることを証明できて誇らしく思う気持ち
- エ マキが猫をいじめていたのではないことを知り、マキが「いい子」であることを自慢したい気持ち

問八 傍線部Ⅲ「わかりづらいよお」について説明した次の文章を読んで、間に答えよ。

本文では、マキの感情の動きが直接説明されるのではなく、へ①くへとへ②くによって描写されている。おばさんの非難に対して、「黙ってそっぽを向いたまま」感情を表にしないマキであったが、お母さんがおばさんに反論した時には、「そっぽを向いたまま」であっても、マキの感情の動きは、表情や行動の代わりに、へ①くがへ③く」と描写することで示されている。

そして、帰り道では、マキの感情の動きが、へ①くの様子だけでなく、さらに、へ②くがへ④く」という形で描写されている。

フミは、こんなマキの不器用な感情表現の中に「かわいげ」があるように思われ、へ⑤くで「わかりづらいよお」と笑っている。

(1) 空欄へ①～・へ②～に入る語句を本文中より抜き出して答えよ。なお、空欄へ①～は七字、空欄へ②～は六字で答えよ。

(2) 空欄へ③～に入る適当な語句を本文中より抜き出し、五字で答えよ。

(3) 空欄へ④～に入る適当な語を本文中より抜き出し、三字で答えよ。

(4) 空欄へ⑤～に入る最も適当な気持ちを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分の気持ちをもっと表現すればいいのにと少し残念な気持ち
- イ いつもは無愛想なマキの気持ちに気付くことができ嬉しい気持ち
- ウ 不器用なマキの行動にいつも振り回されるけど頼もしく思う気持ち
- エ 自分の気持ちを隠そうとする困ったマキに少しあきれ気味な気持ち

㊦ 次の文章を読んで、後の間に答えよ。(設問の都合上、原文を一部改変している。なお、設問に字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む。)

考えてみるに、明治このかた、進んだもの新しいものはすべて海の彼方から渡来してくると思われている。舶来文化は翻訳文化である。翻訳とはどういうことか。一口で言うならば、二カ国語間で一方から他方へ、言葉の形式、つまり文字や音声は犠牲にして、何とか意味だけは伝えようとする作業である。したがって、翻訳文化では言葉の意味、内容にのみ注意が向けられて、音声はあまり重視されないようになる。何事によらず思想が大事なのである。思想があるとすると、舌を嚙むような難解な言葉で綴つてある文章でも、大手をふつてまかりとおる。逆に、はっきりした思想などもつ必要のない、あるいは、なまじつかの思想などは邪魔になるはずの文学作品についても、ことごとく思想が問題にされる。すぐれた文学者が思想がないといって軽んじられていたのが、英訳が海外で高い評価を得ると、急にそわそわしだして、思想のことは柵なだにあげて賛美の理由を探しはじめたのなどは滑稽である。翻訳によつてものを判断するパターンはこういうところまで及んでいる。

こんなことが起こるのも、耳を塞いで目だけで文学を理解しているからで、それはへ 1 へ文学だけに止まらないだろう。すべてのことが文字中心、音声軽視のゼンテイaの中で処理されている。へ 2 へ、お互いにそのことをほとんど意識しなくなっているのだから、おもしろい。

目を酷使するから、教育を受けた人は大部分がメガネをかけなくてはならなくなる。時間さえあればものを読んでいる。どんなにたわいないものでも、へ X へ。こういう子どもが大人になると、へ 3 へ週刊誌などを読む。

へ 4 へ、ものを聞くのは、落語、講談、漫才から、「高級な」講演に至るまで、読書ほどりっぱなこととは考えられない。せいぜいレクリエーションである。それやこれやで、すっかり耳が悪くなってしまう。選挙のときなど、まったく、ひどいことを大声でわめいてまわるが、聞く耳が馬鹿になっているから、腹も立てない。へ 5 へ口で言うことなど問題にならないと思

① って馬耳東風。そうはさせまいと、しゃべる側はべらぼうなマイクの音量で叫ぶ。言葉による交流などはじめから考えられていないかのようである。

外国の映画を見てみると、よく主人公などがひとり長広舌をふるう場面が出てくる。それがドラマのクライマックスに近いところに現われる。スジを追うのに急なわれわれは、その長広舌をなくもがなものに思うことがすくなくないが、察するところ、もともとの観客にはこういう独自のせりふが何とも言えない味わいをもっているであろう。そうでなくては、ああいう要所へああいうものを入れるはずもないからである。

外国では法廷のシーンがドラマとして歓迎されるというのも、同じように言葉のおもしろさに敏感な耳をもっている人の多い社会であるのを思わせる。日本の法廷では、まるで砂をかむようなやりとりしか行われていないから、テレビ・ドラマの軸を法廷におくというようなことは思いもよらない。法律もご多分に洩れず、翻訳文化において視覚的な性格のつよいものに変化してしまっていると考えられる。

日本の近代文化は Y 〳 の文化である。言葉については思想、つまり、目、文字、読書によってとらえやすい部分をもっとも尊重され、言葉の調子とか、おもしろさは低級なものとして放置されてきた。笑いの価値は公認されることもなく、シンコクで難解なものが高尚であるときまっている。芝居といえは思想が衣裳をつけて歩いていくようなものが新劇としてもてはやされるから、普通の人間は劇場へ近寄ろうともしない。本当におもしろかったと思うような演劇を経験しないまま一生を終わる人がすくなくない。芝居をつくる人、演ずる人、見る人がそれぞれ Z 〳 を悪くしている。

わが国の絵画はヨーロッパの技法をかなり早く身につけることができたのに、音楽の方は近年になってようやくすこし本当のことができるようになったにすぎない。④ 明治以降の文化は絵画的であつたとしてよい。

ものの考え方のことをもの見方と言うし、視点、観点、観察、視野など、すこし考えても認識の基本に触れるような語が申しあわせたように視覚的であることを見ても、われわれの文化がいかに目中心になっているかがわかる。そして、この視覚的性

問一 二重傍線部 a、e の片仮名を漢字に直せ。

問二 空欄へ 1 ～ 5 へに入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号は二度使えない。

- ア せっせと イ そもそも ウ おそらく エ しかも オ それに反して

問三 空欄へ X へに入る最も適当な一文を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 時間つぶしのために何か読むことが知識人に必要なのである
イ 教育を受けた人は、何かの中毒にならざるを得ないのである
ウ ゲームをして、文庫本を読むには、集中力が必要なのである
エ 文字を読んでいれば勉強しているように周囲が思ってくれる

問四 傍線部①「馬耳東風」について、

(1)どのような意味で用いられる四字熟語か。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 他者の意見を正しく受け止め、自らを省みること
- イ 人の意見や批判などを心にとめず、聞き流すこと
- ウ 迅速な対応を心がけて、人の話に耳を傾けること
- エ 人の意見は聞くが、むしろ、反対に振る舞うこと

(2)動物が使われた四字熟語を、後の()内の動物の中から一つ用いて、漢字で答えよ。

(牛 虎 蛇 羊 鳥 猪)

問五 傍線部②「なくもがな」の、ここでの意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア ないほうがいい
- イ なかつたらこまる
- ウ あつたらこまる
- エ あってほしい

問六 傍線部③「何とも言えない味わいをもっているであろう」とあるが、こういった長広舌に、何があると言っているのか。本文中より抜き出し、八字以内で答えよ。

問七 空欄へ Y 〽・へ Z 〽に入る最も適当な語を、それぞれ本文中より抜き出し、漢字一字で答えよ。

問八 傍線部④「明治以降の文化は絵画的であった」とは、どういうことか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 明治以降、進んだもの新しいものは、すべて海外から絵に表現されて渡来したということ
- イ 翻訳文化では、言葉の意味や内容よりも音声や色彩が重んじられるので美しいということ
- ウ すぐれた文学者よりも、ヨーロッパの技法を身につけた画家の方が育ちが早いということ
- エ 明治以降の日本では、目で見ることだけを重視し耳で聴くことを軽視してきたということ

問九 傍線部⑤「ギリシヤ人は歩きながら、話をしながらもの考えた」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を用いて、二十五字以内で説明せよ。

問十 傍線部⑥「こういう文章」とは、どのような文章か。それを説明した次の一文について、空欄へⅠ～Ⅲに入る最も適当な語句を、後の〈A群〉のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号は二度使えない。

へⅠ～をまとめるのに人と話し合わず、へⅡ～を書くに当たって、へⅢ～を考慮せずまとめられた文章。

〈A群〉 ア 思考 イ 発音 ウ 文字 エ 人の意見 オ 音の響き